

## すきノリをつくる

すきノリはおむすびやまきずしにかかせないものです。すきノリはどのようにしてつくられるのでしょうか。ここでは、竹ひびを使ったむかしながらの方法を紹介しましょう。

### ① 11月の初めころ

干潟にひびを立てて、ノリの種がつくのを待ちます。



ひびを立てる

### ② ついたノリが黒く見え始めると、

ノリの生長にあった場所へひびを動かします。

### ③ 12月の初めころ

から、15センチメートルくらいにのびたノリをつみ始めます。とったノリは海水で洗います。



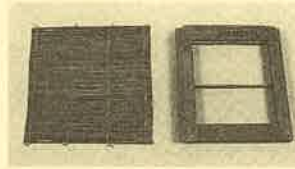
ノリのつみとり

④ 台の上で細かく切りきざんでから洗いかごに入れ、こんどは真水で洗います。



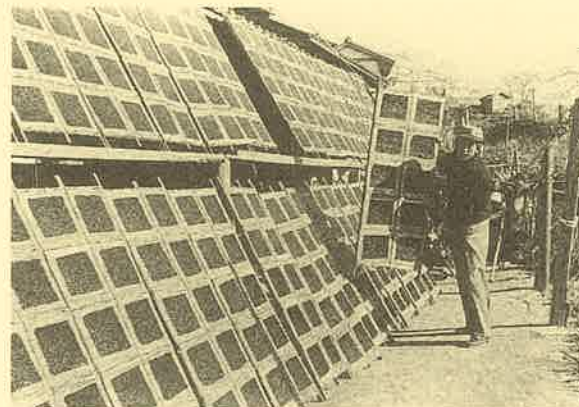
洗いかご

⑤ たらいの中でノリを水にとき、「す」と「すきわく」を使って1枚1枚すいていきます。



すとすきわく

⑥ ノリのついたすを木のわくにかけて日光でかわかすとすきノリができあがります。

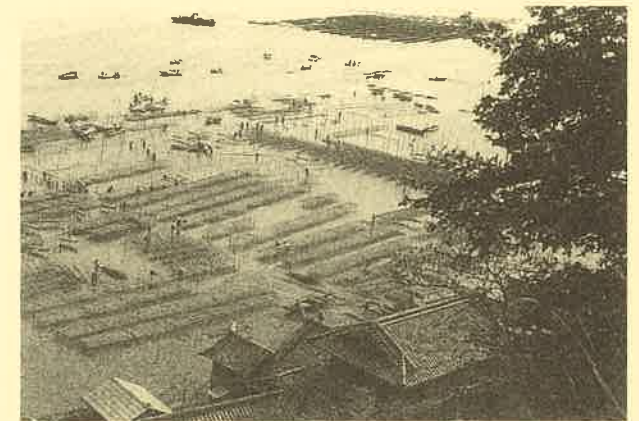


ノリのかんそう

※ノリ養殖作業風景の写真は南区の大下隆雄さんが写されたものです。

## 学習の手引 第13号

# ノリ養殖



ノリ養殖の準備がすすめられているようす  
(1960年ころの仁保)

## 広島市郷土資料館

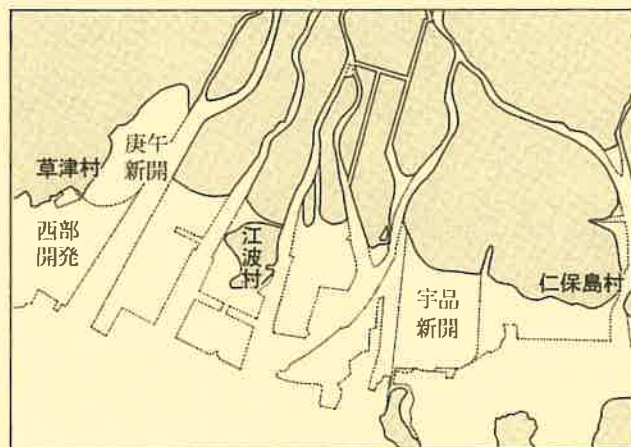
☎734-0015 広島市南区宇品御幸二丁目6番20号

☎(082)253-6771

## めぐまれた自然

太田川の河口付近の海は、波静かで潮の満干の差が適度にあるだけでなく、栄養分をたくさんふくんだ川の水と海の水がまじりあう所でもあります。こうした場所ではノリがよく育ち、人々は石などに自然についたノリをとって食べていました。

この太田川の河口には、川の水が運んできた土や砂がたまって広い干潟ができていました。やがてその干潟で、ノリを人工的にそだてる養殖が始められ、たくさんのノリが人々の手に入るようになりました。



海苔養殖が行われた村

(明治時代以前の広島、点線は明治以降に干拓された所)

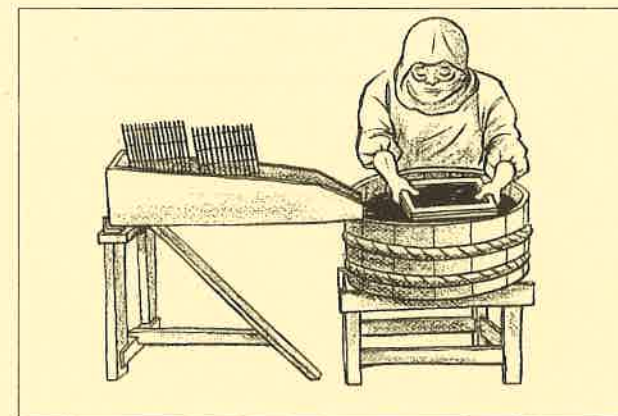
## ノリ養殖の移りかわり

広島市内では、海沿いの仁保・江波・草津などでノリ養殖がさかんに行われていました。仁保の海でノリづくりが始まったのは、江戸時代の初めころといわれています。そのころの記録にも、安芸国（今の広島県の西部）の産物として仁保のノリのことが書かれています。

人々は、近くの山から切りだした木や竹を立て、それについたノリをとっていました。この木や竹のことを“ひび”といいます。初めころは、ひびからとったノリをそのまま広げてかわかすだけでした。江戸時代の終わりころになって、細かく切ったノリを紙のようにうすくすいたすきノリが



ひびについたノリ



すきノリをつくるようす

つくられるようになりました。この方法が始められたことで広島ノリは有名になりました。

明治時代になると、海沿いの埋め立てが進み、ひびを立てる干潟が少なくなりノリ養殖は大きないたでを受けました。太平洋戦争のあと、竹をすだれのように組んだひびや網のひびが使われるようになりました。さらには、網のひびを海にうかせてノリをそだてる方法が工夫され、ずいぶん沖あいでも養殖ができるようになりました。

しかし、最近では海のごれなどが原因でノリの養殖はあまり行われなくなりました。